

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 良平《りょうへい》の

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 小田原|熱海《あたみ》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「均のつくり」、第3水準1-14-75] 《におい》を

小田原|熱海《あたみ》間に、軽便鉄道|敷設《ふせつ》の工事が始まったのは、良平《りょうへい》の八つの年だった。良平は毎日村|外《はず》れへ、その工事を見物に行った。工事を といったところが、唯《ただ》トロッコで土を運搬する それが面白さに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後《うしろ》に佇《たたず》んでいる。トロッコは山を下《くだ》るのだから、人手を借りずに走って来る。煽《あお》るように車台が動いたり、土工の祥天《はんでん》の裾《すそ》がひらついたり、細い線路がしなったり 良平はそんなけしきを眺《なが》めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しょに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処《そこ》に止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或《ある》夕方、 それは二月初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外《ほか》は何処《どこ》を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番|端《はし》にあるトロッコをpushした。トロッコは三人の力が揃《そろ》うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、 トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内にかれこれ十|間《けん》程来ると、線路の勾配《こうばい》が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくらpushしても動かなくなった。どうかすれば車と一しょに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好《よ》いと思ったから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初|徐《おもむ》ろに、それから見る見る勢《いきおい》よく、一息に線路を下《くだ》り出した。その途端につき当りの風景は、忽《たちま》ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮《はくぼ》の風、足の下に躍《おど》るトロッコの動揺、 良平は殆《ほとん》ど有頂天《うちょうてん》になった。

しかしトロッコは二三分の後《のち》、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度pushじゃあ」

良平は年下の二人と一しょに、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後《うしろ》には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断《ことわ》ってトロに触《さわ》った？」

其処には古い印祥天《しるしばんでん》に、季節外れの麦藁帽《むぎわらぼう》をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。 そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しょに、もう五六間逃げ出していた。

それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりした記憶を残している。薄明りの中に仄《ほの》めいた、小さい黄色の麦藁帽、 しかしその記憶さえも、年毎《としごと》に色彩は薄れるらしい。

その後《のち》十日余りたってから、良平は又たった一人、午《ひる》過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外《ほか》に、枕木《まくらぎ》を積んだトロッコが一|輛《りょう》、これは本線になる筈《はず》の、太い線路を登って来た。このトロッコをpushしているのは、二人

とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易《やす》いような気がした。「この人たちならば叱《しか》られない」 彼はそう思いながら、トロッコの側《そば》へ駈《か》けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、 縞《しま》のシャツを着ている男は、俯向《うつむ》きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう〔#「よう」に傍点〕」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われ〔#「われ」に傍点〕は中中《なかなか》力があるな」

他《た》の一人、 耳に巻煙草《まきたばこ》を挟《はさ》んだ男も、こう良平を褒《ほ》めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好《よ》い」 良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、怯《お》ず怯《お》ずこんな事を尋ねて見た。

「何時《いつ》までも押していて好《い》い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑《みかんばたけ》に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路《みち》の方が好い、何時《いつ》までも押させてくれるから」 良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下《くだ》りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直《すぐ》に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の〔#「均のつくり」、第3水準1-14-75〕《におい》を煽《あお》りながら、ひたひ《すべ》りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」 良平は羽織に風を孕《はら》ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」 そうもまた考えたりした。

竹藪《たけやぶ》のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止《や》めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先《つまさき》上りの所所《ところどころ》には、赤錆《あかさび》の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖《がけ》の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはっきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好《い》い」 彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論《もちろん》彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切崩《きりくず》した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児《ちのみご》をおぶった上《かみ》さんを相手に、悠悠《ゆうゆう》と茶などを飲み始めた。良平は独《ひと》りいらいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈《がんじょう》な車台の板に、跳《は》ねかえった泥が乾《かわ》いていた。

少時《しばらく》の後《のち》茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟《はさ》んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有《ありがと》う」と云った。が、直《すぐ》に冷淡にしては、相手にすまないと思い直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあったらしい、石油の〔#「均のつくり」、第3水準1-14-75〕がしみついてた。

三人はトロッコを押しながら緩《ゆる》い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外《ほか》の事を考えていた。

その坂を向うへ下《お》り切ると、又同じような茶店があった。土工たちがその中へはいった後《あと》、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」 彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロッコの車輪を蹴《け》って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、 そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木《まくらぎ》に手をかけながら、無造作《むぞうさ》に彼にこう云った。

「われ〔#「われ」に傍点〕はもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれ〔#「われ」に傍点〕の家《うち》でも心配するすら〔#「ずら」に傍点〕」

良平は一瞬間 | 呆気《あっけ》にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途《みち》はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならない事、 そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆《ほとん》ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思った。泣いて

いる場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取って附けたような御時宜《おじぎ》をすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時《しばらく》無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐《ふところ》の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側《みちばた》へ抛《ほ》り出す次手《ついで》に、板草履《いたぞうり》も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋《たび》の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙《はる》かに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路《さかみち》を駈《か》け登った。時々涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪《ゆが》んで来る。それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山《ひがねやま》の空も、もう火照《ほて》りが消えかかっていた。良平は、愈《いよいよ》気が気でなかった。往《ゆ》きと返《かえ》りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡《ぬ》れ通ったのが気になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側《みちばた》へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば」良平はそう思いながら、辻《すべ》ってもつまずいても走って行った。

やっと遠い夕闇《ゆうやみ》の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいって見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気《ゆげ》の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水を汲《く》んでいる女衆《おんなしゅう》や、畑から帰って来る男衆《おとこしゅう》は、良平が喘《あえ》ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家《うち》の門口《かどぐち》へ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲《まわり》へ、一時に父や母を集ませた。殊《こと》に母は何とか云いながら、良平の体を抱《かか》えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜《すす》り上げ啜り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣《わけ》を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……………

良平は二十六の年、妻子《さいし》と一しょに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆《しゅふで》を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？ 塵労《じんろう》に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。……………

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1984（昭和59）年12月25日38刷改版

1989（平成元）年5月30日46刷

入力：蔣龍

校正：鈴木厚司

2004年10月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。